

安吾賞選考委員



委員長

野田 一夫

(財)日本総合研究所理事長
多摩大学名誉学長

副委員長

猪口 孝

中央大学教授 法制審議会委員
日本学術会議会員

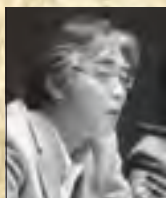
池田 弘

(学)新潟総合学園総長



岩里 祐穂

作詞家



齋藤 正行

安吾の会世話人代表

新潟・市民映画館シネ・ウインド代表



坂口 綱男

写真家／エッセイスト

(坂口安吾長男)



古海 正子

日本IBM人事部

GAアシスタントサービスマネジャー

お問い合わせ先

〒951-8550 新潟市文化スポーツ部文化政策課

【安吾賞事務局】

TEL. 025-226-2563 FAX. 025-230-0450

e-mail bunka@city.niigata.lg.jp

URL <http://www.city.niigata.jp/info/bunka/ango/>

坂口安吾デジタルミュージアム

URL <http://www.ango-museum.jp>

坂口安吾撮影：中村 正也

安吾賞推薦人(敬称略 50音順)

青木 邦雄
青島 健太
嵐山 光三郎
安斎 隆
稲盛 和夫
敦井 榮一
植村 鞆音
内田 力
梅原 猛
荻野 アンナ
角川 歴彦川淵 三郎
菊池 明郎
北川 正恭
小林 幸子
佐藤 忠男
佐藤 信秋
白井 克彦
関川 夏央
高澤 正樹
武田 鉄矢
立松 和平
田中 里沙
檀 太郎
中山 輝也
野沢 慎吾
服部 幸應早野 透
半藤 一利
火坂 雅志
福武 總一郎
藤沢 周
牧 作樹
松岡 正剛
三瀧 未雄
三田 ジョンストン 智子
三田村 邦彦
村松 友視
村山 俊晴
山口 昭男
山本 寛斎(財)東日本鉄道文化財団専務理事
スポーツライター
作家
(株)セブン銀行代表取締役社長
京セラ (株)名誉会長/稲盛財団理事長
新潟商工会議所会頭
著述業
(株)コロナ代表取締役社長
哲学者
作家/慶應義塾大学教授 (文学部)
(株)角川グループホールディングス代表取締役会長
(株)角川書店取締役会長
(財)日本サッカー協会キャプテン
筑摩書房代表取締役社長
早稲田大学大学院教授
歌手
映画評論家/日本映画学校校長
参議院議員
早稲田大学総長
作家/神戸女学院大学客員教授
新潟放送相談役/日本文芸家協会会員
海援隊
小説家
宣伝会議編集室長
CMプロデューサー/エッセイスト
新潟経済同友会代表幹事
セコム上信越 (株)代表取締役
(学)服部学園理事長/服部栄養専門学校校長/
医学博士/新潟市食と花の総合アドバイザー
朝日新聞コラムニスト作家
小説家
(株)ベネッセコーポレーション代表取締役会長兼CEO
作家/法政大学教授
(株)ティー・ヴィー・キュー九州放送代表取締役社長
編集工学研究所所長/ISIS編集学校校長
(株)ミヅマアートギャラリーディレクター
アルビレックスチアリーダーズ・チーフディレクター
俳優
作家
日本銀行監事
岩波書店代表取締役社長
デザイナー/プロデューサー

安吾賞賛同者(敬称略 50音順)

渥美 千尋
泉田 裕彦
内海 桂子
遠藤 実
ジェームス三木
篠田 正浩
瀬戸内 寂聴
檀 ふみ
手塚 眞
福原 義春
松永 二三男
宮田 亮平
(株)旺文社外務省南部アジア部長
新潟県知事
(社)漫才協会名誉会長
(財)遠藤実歌謡音楽振興財団理事長
脚本家
映画監督/早稲田大学特命教授
作家/僧侶
女優
ヴィジュアルリスト
(株)資生堂名誉会長
日本テレビ放送網 (株)企画開発担当部長
東京藝術大学 学長

肩書きは平成20年4月1日現在のものです。

後援：産経新聞社/新潟日報社/毎日新聞社/読売新聞東京本社/
朝日新聞新潟総局/日本経済新聞社新潟支局

Ango's words

私は偉大な破壊を愛していた。

墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。

余は偉大なる落伍者となっていていつの日か歴史の中によみがえるであろう。

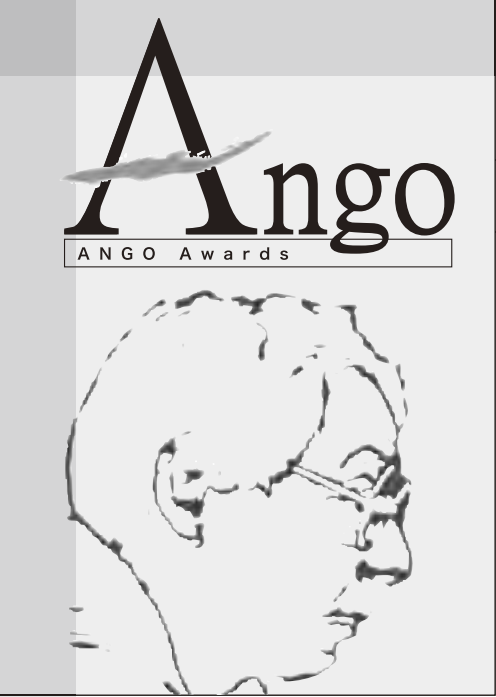
僕の生き方にただ一つでも人並みの信条があったとすれば、

それは『後悔すべからず』ということであった。

ほんとうに可愛い子供は悪い子供の中にいる。



新 潟 市



安吾の 衝撃

1945年8月15日、ポツダム宣言受諾を告げる玉音放送が流れた。「神州不滅」の熱狂に踊らされ、「一億玉砕」を唱えてきた日本は、敗戦の日から一変した。

焼け野原の日本にコーンパイプをくわえたマッカーサーが降り立ち、日本国民はマッカーサーと進駐軍を解放者として迎えた。

軍国教育の先頭に立っていた教師は「米国民主義」の崇拝者になり、特攻崩れは生きるために闇屋となった。街には進駐軍兵士と連れ添う戦争未亡人の姿があった。

廃墟と化した街並みにたたずむ人の心も、これまでの価値観が崩壊した虚脱感と明日への懷疑心により焼き尽くされていた。

天皇の「人間宣言」で明けた1946年も混乱は続いた。その年の4月、茫然と焼け跡に立ち尽くす日本人の心に一編のエッセイが鋭く、奥深い、一撃を与えた。坂口安吾の「墮落論」だった。

「人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない」

安吾の登場は「地軸を揺るがすような響き」を立てるほどの衝撃だった。

「戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。人間だから墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけだ―墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない」

甘い自己弁護や皮相的な解説、世のまやかしを許さず、「人間の実在を認めよ」との本質を鋭くえぐった安吾のメッセージは、混迷の世相を切り裂く一条の光となった。

第3回 安吾賞

新潟市ゆかりの作家である坂口安吾は、文学をはじめ多くの分野において何事にも一生懸命に挑み続ける人であった。挑戦者を応援する都市風土を育み全国に発信するため、安吾生誕百年の2006年、安吾の精神を具現しさまざまな分野で挑戦し続けることにより、わたしたち日本人に喝を与えた個人または団体を表彰する「安吾賞」を創設した。

募集締切

2008年

7月10日



出でよ、 現代の安吾

戦後60年。モノと情報が溢れ、

自由と気ままさを謳歌する日本に、「開国」「敗戦」に続く「第3の敗戦」がささやかれている。

「豊かさの中の空虚さ」に蝕まれ、「明日は今日より貧しくなる」との黄昏感に染まっていた日本のこそ、現代の坂口安吾が求められているのではないか。

敗戦で虚脱した日本に安吾が登場し、心底からの衝撃を日本人に与えたように、現代・日本に世相を切り裂くメッセージを求めたい。

メッセージや論説に限るものではない。名誉や実利を捨てた献身的行動や社会システムを変える新しい実践も当然範疇に入るし、世俗の常識を変える挑戦精神や自己実現を図る超然的な努力も現代の安吾にふさわしい。

生きる甲斐を見失って途方に暮れている日本に、いま「大いなる喝を入れる」ことが重要と思う。

安吾精神を顕彰

坂口安吾が生まれ、青春の思索を育んだ地である新潟市から、現代の安吾に光を当てたい。日本人に大いなる勇氣と元氣を与え、明日への指針を指し示すことで現代の世相に喝を入れた人や団体に「安吾賞」を贈りたい。

世俗の権威にとらわれずに本質を提示し、反骨と飽くなき挑戦者魂こそ安吾精神にかなっており、「安吾賞」にふさわしい。

坂口安吾撮影：林 忠彦

坂口安吾

坂口安吾は1906（明治39）年10月、新潟市西大畑町に生まれる。1931（昭和6）年に発表した「風博士」、「黒谷村」で新進作家として認められ、1946（昭和21）年4月、人間の本質を鋭くえぐった「墮落論」を発表。焼け跡の廃墟にたたずむ人々に衝撃を与えた。

1955（昭和30）年2月17日、群馬県桐生市で48歳で逝去。今は新潟市秋葉区大安寺にある坂口家の墓所に眠っている。主な作品に「日本文化私観」「白痴」「桜の森の満開の下」「不連続殺人事件」「肝臓先生」「安吾新日本風土記」などがある。



第1回 安吾賞 受賞者



安吾賞
野田 秀樹 劇作家・演出家・俳優

安吾との出会いは大学の頃。安吾は無頼派と呼ばれていたが、その生きざまはとても現代人には真似できない凄みのようなものを感じていた。当時の

アングラ演劇が陳腐に思えたものだった。安吾の原作で劇をやらせてもらった上に、賞までいただけるなんて、安吾に感謝したい。



新潟市特別賞
横田 滋 早紀江

私たちはこの拉致問題を通じ、国が国民をどう守ってくれるのかということで活動を続けてきました。これからも皆さんに関心を持っていただけるよう活動をしていきたいと思います。また私たちの受賞が拉致問題の一刻も早い解決につながればよいと思っています。

第2回 安吾賞 受賞者



安吾賞
野口 健 アルピニスト

この安吾賞は文学賞ではなく「安吾的な生き方」に対して贈られる賞だと聞いた。安吾的な生き方とは私の解釈だと「既存の価値観や旧弊にとらわれず、

社会に警鐘を鳴らし、自らを生ききったもの」という風に思っている。私は人生とは己を表現する、自己表現の舞台だと思っている。私はただ生きてきた。ひたすらに生きてきた。それが今までの自分の全てだと思う。今回、結果として私の生きざまがこのように形で評価されることに喜びを感じている。今後もこの賞に恥じることはないよう生きていきたい。



新潟市特別賞
カール・ベンクス
建築デザイナー

子供の頃から興味があった日本の文化・建築、その日本で認めていただけた事は本当に嬉しいかぎりです。家を再生する事は哲学を持つ事です。私の仕事は古民家の再生です。ただの修理ではなく、宝石の原石を磨くような仕事なのです。一度失ったら二度と戻ってこない日本の文化・技術・芸術を後世に伝えられるのは「今が最後」だと思います。古民家の再生を通しそれらを後世に残せるように、そして一人でも多くの方に関心を持ってもらえるようにこれからも頑張りたい。